

フーの木よ大きな葉を広げて

高橋 実

故大塚中氏は私の大学の同期である。昨年五月の葬儀の通夜の席で、あの『フーの木よ森から』の著書が山積みされていた。フーの木は朴ノ木の魚沼方言である。この本のことにはしばらく忘れていた。二〇〇二年、今から十六年前の事だった。この本は私の勤める「あらぐさ出版」こと「あかつき印刷」で作った。出来上がった本を車に積んで大塚山荘へ届けた頃のことを思い出した。出版するにも資金はなく、刊行資金を皆さんから募った。その資金をもとにこの本は刊行された。長い政治活動の中で、大塚中さんと弊社の小黒社長とは知り合っていた。人と人とは鎖のように繋がって生きている。人の鎖は限りなく広がって、困ったときに助けてもらい、困っている人には手を差し伸べる。

絵本の家「ゆきぼうし」はこうした人の鎖の中で生まれ、続いてきた。大塚中さんが須原スキー場の近くに小さな山荘を建てたのは今から四十年も前の昭和五十二年のことだったという、以来多くの人の鎖の輪の中で成長を続け、今日にいたったのである。そして今大塚夫妻不在の中でもこうしてこの施設は続いている。しかし、どんなに人の鎖の輪が大きく広がっても、初めの一本の鎖は、誰かの一声の中から生まれる。大塚氏の低い声が今でも耳元に響いてくる。フーの木よ、今はまだ残雪深いこの森も、春が来ればあの大きな葉を森の中間っぱいに広げてくれるだろう。